

高齢者体験セットを用いての片麻痺高齢者の 車いす移乗・移送の演習評価

－看護師役・高齢者役・観察者の3側面の学生の記録より－

Laboratory Estimation of Student's in the Aged Simulation Set : How to Use Wheelchairs for the Elderly with Hemiplegia －The Reports of Student's from Triple Aspects : as a Nurse, an Elderly Person and an Observer－

緒方 昭子・竹山ゆみ子・土屋八千代

Shoko Ogata・Yumiko Takeyama・Yachiyo Tsuchiya

要 旨

3年前期に実習への応用を目的として構成している、臨床看護論Ⅱにおける「片麻痺高齢者の車いす移乗・移送」の演習において、高齢者や片麻痺対象の理解を深めるために高齢者体験セットを使用し、観察者の視点も含めた3側面の学生の気づき・学びの記録を分析し学生の学びと授業設計の評価を得るために、看護師役・高齢者役・観察者の3側面ごとの学び・気づきの記録を演習目標に沿って分析した。その結果から看護師役・患者役・観察者共に高齢者の理解、麻痺の対象の理解ができ、体験から多くの学びを得て、声かけや信頼関係など看護技術のみではない看護師の役割まで気づいていることがわかった。しかし対象の状況に応じた方法の選択まではできていなかった。高齢者体験セットを使用しての演習はより具体的な対象理解とその援助につながり、3側面の記録は学生の不可視の学びの確認ができた。授業展開については時間配分や演習方法についての課題が明確となった。

キーワード：高齢者体験セット，車いす，演習評価

the aged simulation set, wheelchair, laboratory estimation

I. はじめに

看護教育では、「講義ないし校内実習で事前の学習をし、その後臨床実習でそれらの学習内容を統合しながら看護の実践能力を身につけることになる」（田島，1997）と述べられているように、講義から演習そして実習への継続が求められ、実習を意識した演習の取り組みが重要と考えられる。

平成8年のカリキュラム改正より実習時間が減少したことで、校内実習（演習）の果たす役割はさらに大きいものと考えられる。

そのような中で、当大学の成人・老年看護学講座においては、看護学実習への導入として3年次前期の臨床看護論Ⅱの科目で、“事例展開を通して、根拠を持った援助の具体的な選択や実践に伴

う責任および評価の重要性の認識を深める”という学習目標を掲げ、成人・老年看護学で習得すべき技術項目を精選し30時間の技術演習を計画している。その演習において毎年、片麻痺高齢者の車いす移乗・移送の演習を行っているが、健康な学生同士の演習では片麻痺患者や高齢者のイメージがつきにくいため、片麻痺高齢者の個別性に応じた援助となりにくく、基本技術の演習となりがちであった。グループごとの演習においては、高齢者役・看護師役以外の見学者の学生の演習への取り組みや意識付けがやや不明瞭であった。また老年看護学実習前技術チェックにおいて、車いす移乗・移送をOSCE（客観的臨床能力試験）として取り入れており、その評価では不合格者の約9%が対象理解不足であったが、再試験における学生の自己評価では高齢者・麻痺の理解が上位に記載されたことを報告している（内田，2008）。

そこで、学生が高齢者をイメージしやすく高齢者理解を深めるために、車いす移乗・移送に高齢者体験セットを用い、観察者の学生の役割意識を明確にするために、演習終了後の気づき・学びを記載する用紙を用いた。記録用紙から学生の高齢者理解の状況や体験からの学びを演習目標と照らし合わせ授業評価を行うために、学生の記録内容の分析に取り組んだ。運動機能障害のある高齢者の日常生活援助（車いす移乗・移送）の演習に高齢者体験セットを用い、演習後学生が記載した高齢者役・看護師役・観察者の3側面の気づき・学びの記録から演習目標に沿って学生の学びおよび演習の評価を行うことで、今後の車いす移乗・移送の演習方法についての示唆を得ることを目的とする。

II. 研究方法

1. 対象

A大学3年生62名の演習後の気づき・学びの記録用紙

2. 方法

演習後に高齢者役・看護師役・観察者ごとに学生の気づき・学びを記載した記録用紙から、役割ごとに学生が気づき・学びとして記述した文章を

コードとして抽出し、研究者間で類似するコードをサブカテゴリー化し、さらにカテゴリー化した。

3. 講義の概要

1) 学生の履修状況

1年次後期の老年看護学概論において、グループワークと発表を通し老年期の特徴、2年次後期の老年看護援助論において、対象理解と看護を講義および高齢者体験セットを用いて学習し、老年看護の方法については日常生活援助項目ごとにグループワークを行い、ロールプレイを用いた発表を通して学びを深めている。脳血管障害のある対象の看護については成人看護援助論Ⅲの2時間で学習しており、1年次に基礎看護学で体位変換および車いす移乗・移送を履修している。

今回の演習は3年次前期の看護臨床論Ⅱ（看護過程30時間、看護技術30時間）であり、90分2コマで運動機能障害のある高齢者の日常生活援助を、学生を半数に分けそれぞれ1回の車いす移乗・移送の演習を行う。学生の履修状況をふまえ、既習知識を想起し対象に応じた適切な援助を安全・安楽に提供できることを目標に、体位変換は対象の状況に応じて方法を選択する必要がある、1方法だけではないことを説明し教員がデモンストレーションを行った。演習目標を①高齢者の特徴をふまえた看護および倫理的配慮について考え移乗・移送が実施できる、②片麻痺患者の特徴をふまえ、安全・安楽に移乗・移送ができるための技術を習得する、③状況や対象に応じた個別ケアの実施のためにアセスメントの必要性が理解できる、の3項目とした。高齢者理解と片麻痺対象理解を深めるために、高齢者役は右側の上・下肢に高齢者体験セットの拘束具を装着し、1グループ4～5人で対象者それぞれに応じた方法を選択するためにロールプレイとし、看護師役は高齢者役の行動・発言に合わせて技術を選択し援助することとした。

2) 演習方法

演習方法としては、15分間の講義により、高齢者の身体的特徴・精神的特徴についての確認と、片麻痺対象の特徴と起こりうる問題について知識の確認を行い、次に基礎看護学の講義で学習した

体位変換のポイントと演習した体位変換および車いす移乗について想起させ、観察・アセスメントし対象に応じた方法を選択すること。高齢者看護の基本である自立の援助に向けて過剰な援助をしないことを説明しながらデモンストレーションを実施した。その後デモンストレーションで行う体位変換はあくまでも1方法であり、各自対象を観察し情報を得て対象に合わせた方法を選択し演習することを説明し、グループごとに看護師役、患者役、観察者に分かれて交代しながら技術演習を実施した。実技終了後それぞれの役割での気づき・学びを記録用紙に記入し提出とした。

4. 倫理的配慮

学生に研究の趣旨を説明し、参加は自由であり参加の有無は評価には影響しないこと、記録内容は番号をつけてデータ化するため個人は特定されないため、プライバシーは保護され成績には影響しないこと、学会等での発表を行うことを説明し署名での同意を得た。

III. 結果

同意が得られた56名の記載内容を役割ごとに分析した結果、高齢者役で122のコード、25のサブカテゴリー、10のカテゴリー(表1)、看護師役で156のコード、26のサブカテゴリー、11のカテゴリー(表2)、観察者で179のコード、31のサブカテゴリー、10のカテゴリーで構成された。以下、カテゴリーを【 】, サブカテゴリーを《 》, コードを『 』で示す。

高齢者役の気づきや学びは、【スロープや段差などの体験による対象の恐怖心の理解】【麻痺のある対象の理解】【援助方法の検討の必要性】【全てにおいて声かけの大切さ】【高齢者の動きにくさなどの特徴の気づき】【看護師に密着してほしいなどの要望】【声かけにより準備・協力ができ安心】【看護師の支えや配慮で安心】【信頼関係の必要性】【介護をうける側の協力の必要性】の10カテゴリーで構成された。中でも体験セットを用いての気づきとして、『手も足も曲げにくくほとんど動かさなかった』『関節が曲がりやすく

表1 高齢者役 (コード数 122)

カテゴリー (10)	数	サブカテゴリー (25)	コード数
スロープや段差などの体験による対象の恐怖心の理解	7	スロープを後ろ向きに降りる怖さ	8
		段差の不快感と怖さ	4
		車いすで移動する目線の低さによる怖さ	4
		段差・スピードの怖さ	3
		見えないまま座る怖さ	4
		車いすの位置による不安	3
		支持不十分による怖さ	4
麻痺のある対象の理解	3	麻痺側の特徴と注意点	10
		麻痺側に気をつけてほしい	4
		残存機能の意識ができた	6
援助方法の検討の必要性	3	軸足の距離の問題	3
		看護師の体格による問題 援助方法の検討が必要	2 3
全てにおいて声かけの大切さ	2	看護師の声かけの大切さ	4
		スロープ・段差など全てに声かけが必要	8
高齢者の動きにくさなどの特徴の気づき	2	拘束具使用による不自由さの気づき	11
		高齢者の身体的特徴をふまえた対処の必要性	7
看護師に密着してほしいなどの要望	2	看護師に支えたり周囲の配慮をしてほしい	8
		看護師に密着してほしい	3
声かけにより準備・協力ができ安心	2	声かけで安心	8
		声かけにより準備・協力できた	4
看護師の支えや配慮で安心	2	しっかりと支えられて安心	2
		看護師の配慮で安心	3
信頼関係の必要性	1	信頼関係が必要	4
介護をうける側の協力の必要性	1	介護をうける側も協力が必要	2

表2 看護師役 (コード数 156)

カテゴリー (11)	数	サブカテゴリー (26)	コード数
対象と密着したりボデイメカニクスを生かすことの大切さ	4	てこの原理やボデイメカニクスが大切	11
		基底面積や重心を考えることが必要	6
		対象と密着することが必要	5
		うまく密着できない	2
麻痺側の観察と援助	3	常に麻痺側の観察が必要	5
		麻痺側の上肢の固定が必要	4
		麻痺側の巻き込み転倒予防が必要	9
環境調整や車いすの位置を考えることの大切さ	3	移乗までのベッドなどの環境調整	6
		車いすの位置をしっかりと考えることが必要	15
		位置を考えて対象を移動させる	3
残存機能活用の意識	3	対象ができることは行ってもらう	7
		残存機能維持の意識を持つことが大事	6
		対象の健側を活用	5
実施による疑問や課題	3	復習・練習が必要	3
		対象が大きいときなど実際にどうするのか疑問	4
		基礎看護学の学びを忘れていた	5
高齢者の特徴の理解の必要性	2	骨の柔らかさなど身体的特徴の理解が必要	7
		高齢者が理解できたかの確認が必要	3
麻痺の対象の介助は困難	2	麻痺の対象の介助は難しい	3
		実際の移乗は難しい	7
声かけの大切さの再認識	2	技術が必死で声かけが不足	4
		1つ1つの声かけが大事	8
安全・安楽な援助の必要性の再確認	2	安全・安楽な車いす操作の再確認	16
		安全・安楽に努める	6
常時の対象観察	1	常に対象を観察	4
対象に応じた方法の選択の必要性	1	対象に応じた方法の選択が必要	2

いので動作がしづらい』『関節が動かずされるがままの状態だった』『関節を伸ばすのに時間がかかりせかされると痛くなった』『思いのほか肘や膝が曲がらず驚いた』など11の記載が見られた。

看護師役の気づきや学びは、【対象と密着したりボデイメカニクスを活かすことの大切さ】【麻痺側の観察と援助】【環境調整や車いすの位置を考えることの大切さ】【残存機能活用の意識】【実施による疑問や課題】【高齢者の特徴の理解の必要性】【麻痺の対象の介助は困難】【声かけの大切さの再認識】【安全・安楽な援助の必要性の再確認】【常時の対象観察】【対象に応じた方法の選択の必要性】の11のカテゴリーで構成された。体験セットを用いての気づきとして、高齢者体験セットを使用している側を麻痺側と捉え、麻痺に関する記載が『麻痺の対象は感覚が低下しているので看護師が常に気を配らなければならない』『麻痺

側を巻き込んだりしないように注意が必要』『麻痺側の安定と保持を怠らない』『麻痺の患側に注意するのが意外と大変』など28の記載が見られた。

観察者の気づきや学びは、【麻痺のある対象を理解した援助の必要性】【体験後の学習課題】【移乗介助の基本(密着・重心・足の位置)】【麻痺のある対象の特徴の理解】【安全な介助を行う準備】【車いすの位置が重要】【高齢者の特徴を理解した援助の必要性】【観察力・声かけの必要性】【車いす操作の基本と注意】【残存機能を活かした援助の必要性】の10カテゴリーで構成された。高齢者の理解では、『足元、腰の動きが鈍くなり転倒しやすい』『難聴なので近くで低い声でゆっくりしゃべらないといけない』『急に起こすとめまいなどおこすことがあるので起こし方の工夫が必要だと思った』など実施状況を見て評価の視点で記載できていた。麻痺については『麻痺側をぶ

表3 観察者 (コード数 179)

カテゴリー (10)	数	サブカテゴリー (31)	コード数
麻痺のある対象を理解した援助の必要性	5	麻痺側をぶつけない注意	6
		麻痺の対象の状態を把握した援助が必要	6
		バランスを崩さないような援助が必要	4
		常に対象を支えることが大切	7
		麻痺の対象への配慮不足	5
体験後の学習課題	4	狭いところを通る時の注意	4
		介助時看護師が大変そう	4
		自分で調べようという意味	4
		第3者の視点での観察	6
移乗介助の基本 (密着・重心・足の位置)	4	対象と密着	5
		重心移動が大切	4
		足の位置が重要	5
麻痺のある対象の特徴の理解	3	座る位置	2
		麻痺のある人はバランスを崩しやすい	5
		麻痺側の観察が必要	2
安全な介助を行う準備	3	麻痺側上肢の固定の必要性	6
		ベッドの高さ調整が大切	3
		ストッパー確認	2
車いすの位置が重要	3	移乗開始までの準備内容	8
		車いすの適切な位置を考慮することが必要	3
		車いすの位置・角度が介助に影響	5
高齢者の特徴を理解した援助の必要性	3	動きやすさを考え車いすの位置を決めることが必要	6
		ゆっくりわかりやすく話すなど身体的特徴を考慮	8
		転倒しやすいので常に観察が必要	5
観察力・声かけの必要性	2	体位変換時のめまいなどの注意が必要	6
		対象への声かけの必要性	14
車いす操作の基本と注意	2	観察力が看護師に必要	3
		車いすの基本操作の確認	10
残存機能を活かした援助の必要性	2	車いす移送中の基本的注意	13
		残存機能を活かすことが大切	12
		できることは対象に行ってもら	6

ついたり無理な姿勢にならないように注意が必要』『麻痺側の異常の発見が遅れないように観察を行う必要がある』『移動時など麻痺側を忘れがちで脱臼など起こしやすいので気をつけるべきだと思った』など41の記載が見られた。そのほか『移動ではぶつからないようスピード等に注意が必要』『段差を降りるときは車輪を持ち上げる』『対象の身長などに合わせて柵の位置を考える』『ドアで足をぶつけた、見えないところほどぶつからないように注意しないといけない』など、他の学生の行動から車いす操作の基本的注意点を再確認している記載が見られた。

IV. 考察

1. 演習目標の達成状況

1) 高齢者の特徴をふまえた看護および倫理的配慮について考え移乗・移送が実施できる

3者ともに高齢者の特徴を理解した配慮や対応についての記載が見られた。特に高齢者役では、拘束されるという体験を通して高齢者の動きにくさを実感している。看護師役でも動きにくい高齢者役の介助を通して、思うようには動かない高齢者の特徴に気づき、その状況に応じた対応が必要であることを理解している。自分が実施したあとに他の学生の対応を見ることができた観察者の学生では、さらに観察の視点が深まったのではない

かと思われる。高齢者体験セットを用いた授業評価についていくつかその効果が報告されており(山中, 2005 室屋, 2004 福田, 2006), 講義で理解した高齢者像がさらに深まる(原沢, 2004)と言われているように, 学生の誰もがまだ経験していない高齢者であるからこそ, 机上の理解だけではなく自らが体験し気づくことが重要であり, 必要な看護を考えていけるようにすることが求められる。しかし, 臨地実習における車いす移乗援助の困難さとして, 認知力が低いという高齢者の理解不足, 配慮不足が報告されている(安藤, 2006)。今回の演習では, 高齢者体験セットを用いたことで身体的特徴については理解が深まったと思われるが, 認知力が低下することについてはロールプレイができず, 気づけていなかったため, 今後はこの視点も強化し演習計画が必要であることがわかった。観察者の視点としては、『体位変換時のめまいなどの注意が必要』という具体的記述が見られ, 第三者として客観的に観察できている。この観察者の視点が高齢者を理解し根拠に基づいた援助に繋がると考えられる。原沢(2004)は, 体験学習において体験の学びの共有化により自己の気づきを得ることが課題と述べており, 今後は各役割終了後にそれぞれの気づきを共有し確認する機会を持ち, 次の役割と交代するという演習方法・時間配分を考えることが必要だと考えられる。

2) 片麻痺患者の特徴をふまえ, 安全・安楽に移乗・移送ができるための技術を習得する

3者ともに麻痺の理解やその配慮等についての記載が見られた。高齢者役では、『麻痺側に気をつけてほしい』、『残存機能の意識ができた』など, 自分が麻痺の状態になりきることによって気づけたと思われる。過去の実習前技術チェックにおいては, 患者役が麻痺の対象になりきれず, 自由に麻痺側を動かす状況を多く経験した。今後は, 今回の経験が生かされ麻痺のある対象役の状況設定が行いやすいのではないかと思われる。看護師役でも『常に麻痺側の観察が必要』など, 麻痺に対する意識を持ち援助することの必要性を感じていることが分かった。安全に関しては, 特に看護師役で

『ベッドのストッパー確認』、『対象の観察』などの記載が見られた。安楽に関しては, 高齢者役で『しっかりと支えられて安心できた』、『看護師の配慮で安心できた』などの記載が見られ, 精神的安楽についてデモンストレーションでは伝えていなかったが, 学生は高齢者役での自分の体験と気づきを活かし看護師役で援助できていると思われた。鱈坂(2006)が学生の模擬体験について, 「学生は模擬体験で, 様々な感情や反応がわき起こり, その結果援助の必要性を受けとめ, 具体的援助方法へと発展できたと考えられる」と述べているように, 体験学習ならではの学びと評価できる。車いす移乗・移送における安全と安楽については, 安全確保のために重要な車いすの基本的操作に関する記載が多く見られ, 安全面に対する意識は高く基本的技術の習得ができていると評価できる。観察者では, 『ベッドの高さ調節の大切さ』、『車いすの適切な位置を考える』、『車いすの基本的注意』など, 観察者ならではの記載が多く見られた。観察者は当事者ではないため既習の知識と照らし合わせ冷静に他者の行動を観察分析できる。実施者は『行うことが精一杯で・・・できなかった』という言葉に代表されるように, 知識と技術が両立しない状況であると考えられる。そのため第三者である観察者としての気づきを記載することで各自が再確認できると考える。今回は演習中に実施者に直接返すことができず, 最終まとめのみとなった。今回の結果を学生にフィードバックしそれぞれが自己評価し, 今後の演習に活用できるように工夫したい。

3) 状況や対象に応じた個別ケアの実施のためにアセスメントの必要性が理解できる

今回デモンストレーションで1方法を提示し, 学生には状況に応じて方法を選択することを課題とした。看護師役で「対象に応じた方法の選択が必要」, 高齢者役で「援助方法の検討の必要性」のサブカテゴリーが構成された。『自立を促すために観察する』や、『どこまでできるか聞く』などの記載はあったが, ほとんどの学生がデモンストレーションで提示した1方法で実施しており, アセスメントし状況に応じた方法を選択するとい

う目標には達成できていなかった。事例を提示していたが、演習開始時に事例状況を強調する働きかけが少なかった。今回、アセスメント能力を高め実習に応用できることを目標に、方法は単一ではなく対象に応じて選択する必要があることを理解してほしいと考えたが、臨床経験の乏しい学生にとっては対象になりきることも困難であり、その状況を捉えた援助を工夫することはさらに困難と考えられた。模擬患者を用いた演習では、「模擬患者から気分や感情などのフィードバックを受けて説明力やコミュニケーションスキルを高めることができる」（森田，2006）と述べられていることから、より対象に応じた看護の展開を目標とする場合に、模擬患者の導入や演習全体の時間配分とデモンストレーションの方法を検討することが今後の課題である。学生に応用力を求めるためには、演習中の学生一人にひとりの教員が対応できるような教員配置ができるような人的環境の調整も必要と考えられる。演習と実習との相違として、リスクマネジメント能力の甘さも指摘されている（鱈坂，2005）。今回はこの視点での指導が不足していた。演習目標及び方法論の検討による周到な計画が必要であり、今後チェックリスト等を併用し学生が意識化し行動できるような工夫も必要と考えられた。

2. 学生の体験からの学び

高齢者体験セットを装着することで動きにくさを実感でき、看護師役では麻痺の意識ができ効果的な体験ができた。また狭い廊下の走行やスロープと段差の移送体験により、目線の低さによる違いやバックで移動する際の患者の恐怖心や不安感などの記録が見られ、それが『看護師の声かけや説明により安心した』や、『説明が無いことで不安になった』など、声かけや説明の必要性について多くの学生が記載していた。学生たちは自己の体験から自然に患者心理に気づき学んでいた。山中（2005）は、看護技術の不可視的な部分の行為に照準を当てる看護技術教育の提言を行っている。不可視的な部分の行為について教育するためにも、対象に近い状態を体験できることが大きな意味を

持つと考えられる。

移乗介助に際して密着することの大切さや、後ろが見えない不安などが記載され、その場合の信頼関係の必要性など、看護師に必要な資質も記載されていた。車いす移乗という基本的な看護技術において、対象理解はもとより安全面・技術面の指導を行っていたが、学生は信頼関係という看護における重要な視点に気づけていた。学生は基礎看護学から現在までの学びの中でそれらを統合し身に付けてきたと評価できる。記録することにより、技術チェック評価だけでは見えない学生の学びが明らかとなった。評価においては、技術内容の到達状況のみでなく、意味ある行為について学生自身も気づけるような記録を課すことは効果的な学習評価手段である。今後は使いやすい記録用紙を検討し、終了後に実施者と観察者がディスカッションを行えるように演習形態を検討していくことが必要である。

今回の結果を元に、車いす移乗・移送の演習方法と時間配分、教員配置などを検討し、より高齢者理解ができ、対象に応じた援助方法を選択し実施できるような演習計画を検討していきたい。

V. 結論

学生は、高齢者体験セットの使用により、手足が自由に曲がらないなど高齢者や麻痺の対象の理解が深まり、車いす移送により狭さや段差などによる不安感などの患者心理を理解し、その時の看護師の声かけによる安心感など、看護の果たすべき役割について身をもって習得しているため、高齢者体験セットの使用は効果的であった。対象に応じた援助の実施においては、導入やデモンストレーションの不足により十分ではなかったため今後の課題が明らかとなった。また、記録用紙の活用により学生の行動だけでは見えない部分の学びが明らかとなり、今後記録用紙の改良及び学生へのフィードバックのあり方を検討し、より効果的な演習にしていくことが求められる。

引用文献

鱈坂由紀，加藤真由美：高齢者の口腔ケア演習方法の

- 検討—模擬体験による患者理解と援助の気づき—, 第37回看護教育, 288-290, 2006
- 鯉坂由紀, 岡本寿子, 安藤巴恵: 基礎看護教育における安全教育についての考察, 京都市立看護短期大学紀要, 30, 81-87, 2005
- 安藤巴恵, 島田今日子, 服部紀子, 他, : 老年看護学隣地実習で学生が「移乗援助」で困ったと思っている内容の分析, 脳血管疾患の左方麻痺高齢者への援助に焦点をあてて, 第37回看護教育, 291-293, 2006
- 福田和美, 上村美智留: 援助者の観点からみた健康障害のある高齢者疑似体験の意義, 第37回看護教育, 357-359, 2006
- 原沢優子, 松岡広子, 星野純子, 他, : 老年看護学における高齢者理解に向けた体験学習の効果と課題, 愛知県立看護大学紀要, 10, 41-48, 2004
- 室屋和子, 佐藤一美, 出口由美, 他: 老人看護学における高齢者疑似体験による学び—対象理解と援助者の役割—, 産業医科大学雑誌, 26(3), 391-403, 2004
- 森田敏子, 南家貴美代, 有松操, 他, : 模擬患者を用いた看護技術教育方法の開発に関する研究—筋肉注射の看護技術試験に対する学生の認識から—, 第37回看護教育, 273-275, 2006
- 杉本幸枝, 土井英子: 基礎看護学実習Ⅱにおける学生の地上生活援助技術の困難さの分析, 新見公立短大紀要, 29(2), 19-24, 2006
- 田島桂子: NE看護教育ボックス看護教育評価の基礎と実際, 医学書院, 18, 1997
- 内田倫子, 土屋八千代, 山田美由紀, 他, : 老年看護学実習におけるOSCEの試み, 日本看護研究学会誌, 31(3), 292, 2008
- 山中恵利子, 山本純子, 辰巳恵子: 看護学生の看護技術に対する振り返りと意味構築—車いす移動の技術体験に関する質問紙調査より—藍野学院短期大学看護学科紀要, 19, 98-108, 2005